

時を刻んできた古民家 昭和の記憶をひもとく

「豊かな時代じゃなかったけど、楽しいことはたくさんあったね」
江戸時代末期に建てられた赤井の「城本家」を代々守り、今も暮らす城本誠也さん、眞澄さんご夫婦。お二人に、昭和の風情を今も残すその家を中心とした、昭和の暮らしの思い出を尋ねました。

赤井生まれ赤井育ち 一緒に育った「城本家」

誠也 私は今年で83歳になるけど、生まれも育ちも赤井のこの家です。
眞澄 私は昭和52年にこの家に嫁いできました。良い思い出も大変だった思い出もたくさんありますね。

誠也 この家は赤井城の内堀にあるんです。家の前の道路が外堀。赤井城というのは、木山城の殿様が赤井火山の地形を使って建てた支城です。



今では珍しい縁側

眞澄 昔はこの辺りも栄えていて、殿様屋敷があったり、紙すき工場もあったそうです。

誠也 うちは、昔は、今でいう区長みたいな役割を持つ家でした。

眞澄 近所の人は「庄屋さん、庄屋さん」って呼びよったもんね。

誠也 前は葬式や結婚式は全部自宅でした。うちは、葬儀屋なんておらんかったから。うちも居間を開放して式をしていたのを覚えています。

眞澄 お義母さんが残してくれたべっ甲の髪飾りも、お嫁さんに使わせてあげてたんでしょうね。

誠也 蔵には地域の米を蓄えておりました。それに水車もありました。

眞澄 水車は米をつく動力として使われてたんですかね。そういえば、嫁いで来た時には、庭にとうとうと

水が流れ、池にはコイがたくさん泳いでいました。ただ、その時期を境に徐々に池は枯れてしまった。この辺りは水が豊富なことで有名ですが、昔に比べるとその水も少なくなってきた。と実感しています。

戦後に過ごした幼年時代 宿場町として栄えた木山

誠也 私は終戦の2年前に生まれたので、戦争のことは覚えていません。ただ、市内の方ではB29（爆撃機）が焼夷弾をヤギのふんのようにポロポロと落とし、パツと火の手が上がっていた、と聞かされて育ちました。

子どもの頃を思い出すと、集落の子どもたちは当時、飯野小に通っていたんですが、親心だったのか、私だけ木山小に通わされていました。「よそ者だ！」といじめられました（笑）。けれど、その木山小周辺は、当時大変なにぎわいで。町役場もあり、お店もたくさんありました。

眞澄 映画館もあったね。私も小学生の頃遊びに来て、いとこと映画鑑賞したのを覚えている。それに木山神宮で見た紙芝居も思い出です。

誠也 木山は、市内へとつながる宿場町で、舟で物資を運ぶ流通地点でもありました。京都からの荷物なども往来し、その先の津森も繁華街としてにぎわっていたらしいです。

眞澄 私が楽しみにしていたのは、水が流れ、池にはコイがたくさん泳いでいました。ただ、その時期を境に徐々に池は枯れてしまった。この辺りは水が豊富なことで有名ですが、昔に比べるとその水も少なくなってきた。と実感しています。



下町風情を感じさせる昭和の木山

昔の子どもたちの遊び

誠也 子どもの頃は、いろんな遊びがありました。けんか独楽の剣の先を尖らせて相手の独楽を打ち割るとか。パン（メンコ）も人気でした。近所の駄菓子屋でパンを買うのが楽しみで。ガキ大将みたいなのがパンの良かつをいっぱい持ったとなあ。

眞澄 家の裏手のニッケの木の間を子どもたちがこぞって掘って売っていたらしいです。皮まではいい。子どもたちはそうやって、人の畑から作物を取ったりして、勝手なことしてお小遣いを稼いでいたけど…。いい意味でおおらかな時代でしたね。

誠也 トマトはよーちぎって食べよったなあ。当時のトマトは風味が強くてうまかった！それに比べると今のトマトは味が上品で…。クワの実、犬枇杷の味も忘れられんなあ。

国登録有形文化財として登録間近の城本家



次世代に守り継ぐ家と 伝え続ける文化と歴史

眞澄 この家は熊本地震の被害で全壊判定。復旧には大金が必要でしたが、ご先祖様たちが大切に守ってきたものを諦めきれなくて…。そんな時大学の先生が、「大きな基礎に太い柱が立ち、地震で揺すられたら泥壁が崩れて柱を守る。それが日本家屋の良さ」と褒めてくれて。銭食いで腹も立つけど、この家を次世代に残していけることを願っています。

誠也 私たちは地域の語り部もしているんですが、小学生に、「何でこんなことしてるの？」と尋ねられたことがあって。「自分の古里のことを知って、もっと好きになってもらいたい」と答えました。

眞澄 小さい集落の中に火山も城も神社も観音堂もある。魅力がたくさん詰まっているんです。

誠也 今は集落の家も減って、昔のような活気も失われつつありますが、歴史が詰まったこの家と、古里の赤井を大切に守っていきたいですね。



家と同じ歴史を持つ庭の蔵